

日本語と韓国語の談話における文末の
緩衝表現の出現様相
— 計量的な分析を中心に —

金 珍 娥 (きむ・じな)

日本語と韓国語の談話における文末の 緩衝表現の出現様相

— 計量的な分析を中心に —

金 珍 娥 (きむ・じな)

目 次

1. 〈緩衝表現〉とは
2. 条件が統制された談話データ
3. 文末のあり方の文法的概念規定：述語 — 用言の構造体
4. 〈述語文〉と〈非述語文〉
5. 〈述語文〉と〈非述語文〉に現れた〈緩衝表現〉の類型
6. 〈述語文 buffer〉と〈非述語文 buffer〉の分布
7. 話し手と聞き手の条件別の〈緩衝表現〉の使用率
8. 終りに — 談話を成す不可欠の要素としての〈緩衝表現〉

1. 〈緩衝表現〉とは

1.1 本稿の目的

本稿は日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話を成す〈文〉の文末⁽¹⁾に注目し、文末における〈緩衝表現〉の出現の様相を描こうとするものである。〈緩衝表現〉が、話し手をめぐるいかなる条件のもとで、どれほど出現するかを明らかにすることを目的とする。

1.2 緩衝表現 (buffering expression)

以下の〈書かれたことば〉における例に注目してみよう：

例 1) 「課長 ハ 会社 ニ 例ノ 問題 ヲ 調査 させ られ はじめ て い ル ラ シ イ デ ス ネ」

寺村秀夫 (1982; 2002: 60 下線は引用者)

上記の例 1) のように、ヴォイス、アスペクト、テンスといった文法的な意味機能を有する述語で結ばれる文は、既存の文法研究において中心的に扱われてきた対象であり、それ自体で十全に完結した、いわば「完全な」文として考えられてきたものであると言ってよい。

日本語の談話において佐竹秀雄（1995,1997）、メイナード（2004）では、「というか」、「みたいな」などの、話し手と聞き手が直接的で、ストレートに言うことを避け、間接的で、「客観化」し、ソフトに表現するための形態が用いられると報告されている。こうした指摘のように、〈話されたことば〉における文は、〈完全な〉の文の姿で文末が締めくくられているとは限らない。例えば「いいわ・{みたいな}・{感じ}」での「みたいな」、「感じ」といった表現が1つ、あるいは2つほど続く例が、実際の〈話されたことば〉にはしばしば現れる。そこには〈完全な文〉が必要とする文法的な要素以外に、剰余的な要素がしばしば現れる。それら剰余的な要素は、金珍娥（2008ab）において〈緩衝表現〉と名づける働きを見せる：

〈緩衝表現〉(buffering expression)＝「完全な」文としての明確さを失わせ、ほかしたり、間接化するという、話し手のモーダルな態度を示す表現

上の〈緩衝表現〉という概念を根幹に据え、日本語と韓国語の〈話されたことば〉の文末における〈緩衝表現〉のあり方を考察した金珍娥（2008ab）では、こうした〈緩衝表現〉が形態論的、統辞論的な〈過不足構造〉、すなわち〈剰余構造〉と〈欠如構造〉により形成されることを論じた：

〈剰余構造〉：一旦「完全な文」として終止しうる文に、実質的な意味を持たず、無くてもよい要素がつく
例：良かったですね。→良かった{とか}思っ{たりする}みたいな{感じ}ですね。

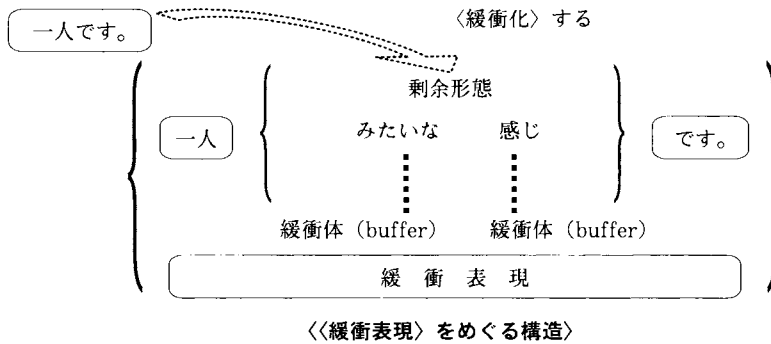
良かった { とか 思っ たりする みたいな 感じ } ですね。

〈欠如構造〉：文法的性質上「完全な文」になるために必要とする後続の要素が現れない
例：韓国語は副専攻ですか？ — え、○○語だけでは全然仕事がないという。{φ}

全然仕事がないという { φ }

〈話されたことば〉の文の文末は、〈完全な文〉が必要とする、ヴォイス、アスペクト、テンスといった文法的な要素に加え、さらに剰余形態で結ばれている剰余的な構造で現れうるのみならず、〈完全な文〉になるための何かが足りない、欠如的な構造でも現れるのである。こうした構造は〈完全な文〉を中心とする文法論が、ともすれば見失いがちな言語事実である。

〈緩衝表現〉の典型的な例を図式化すると、以下のごとくである：



上の形を例にとるなら、本稿で用いる術語は次のごとく説明しうる：

<緩衝化>：「一人です。」で言い終えることができる表現を、「一人みたいな感じですよ。」という剰余形態を用いた表現にすること

<剰余形態>：「一人です」の〈完全な文〉についての、{みたいな}、{感じ}といった必ずしも必要とされない形態。

<緩衝体> (buffer)：{みたいな}、{感じ}といった剰余形態の1つずつのitem

<緩衝表現>：1個から複数の〈緩衝体〉を有する表現、すなわち「一人です。」が、「一人みたいな感じですよ。」といった表現

1.3 先行研究を根幹に据え — 本稿の〈緩衝表現〉

日本語について、佐竹秀雄（1995,1997）やメイナード（2004）は、「みたいな」、「なんて」、「っていう感じ」、「というか」などの表現が、「ソフト化」、「客観化」、「直接引用」、「類似引用」といった機能を果たしていることを述べている。こうした指摘は、本稿の主張を大きく支えてくれるものである。これらの研究は、それぞれの形が持っている機能を主に論じている。

本稿では〈緩衝表現〉という大きな概念の中でどのような類型が存在するのかについてまず述べる。

その上で〈緩衝表現〉の類型は、実際〈話されたことば〉においてどれほどの頻度で現れるのか、話し手と聞き手の条件が変わると、どのような出現の様相を見せるのかを考察する。こうした視点から〈緩衝表現〉を見る論考は、管見では見当たらない。

また韓国語でも同様の働きをする〈緩衝表現〉が存在する。日本語と韓国語の対照言語学的な視点からの〈緩衝表現〉の考察もこれまでなかったものである。

2. 条件が統制された談話データ

2.1 〈自由会話〉の談話データ

本稿では、実際に話された2人の〈自由会話〉を談話データ⁽²⁾として用いる。

本稿で収集した談話データは、日本語会話 40 組、韓国語会話 40 組、計 80 組の談話データである。話者は、20 代、30 代、40 代の男女⁽³⁾で、異なり人数で日本語母語話者が 80 名、韓国語母語話者が 80 名の計 160 名である。話者はすべて東京方言話者とソウル方言話者に制限している。1 つの会話を 15 分間録音し、最初の 5 分間を文字化した、音声で計 1,400 分、転写は計 400 分の転写ファイルとなる。〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉という場面別に分け、内容はすべて直接会って話す〈自由会話〉⁽⁴⁾であり、年齢、性別などの諸条件が統制された談話データである。

本研究の年齢、性別、話者の言語形成地などの諸条件を高度に徹底して統制して得た会話の質的な側面と、世代別に構成された話者の異なり人数や、〈話されたことば〉の特徴を生き生きと表すために行った文字化のデータの量的な側面は、本研究の根幹を支えるものである。

2.2 〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉

会話の構成は、〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉の 2 種類の場面に分ける。親疎関係、親密度に明確な差を設定することで、言語使用の差異、とりわけ文末の言語表現の差異の計量を可能とするためである。年齢別と性別に組み合わせ、2 人 1 組とする。

〈初対面同士の会話〉は同じ年齢の 2 人の会話と、30 代を中心に 10 歳以上の差を置いた目上との会話、そして目下との会話から構成される。こうした構成は親疎の関係が固定されている場合の、他の条件に影響されず、純粋な年齢と性別の差による言語使用の差異、とりわけ文末の言語表現の違いを見るためである。

〈友人同士の会話〉は 20 代と 30 代の同年齢の 2 人の会話に構成する。年齢の差よりも、親密度の度合いによる言語使用のあり方を見るためである。会話の組み合わせを以下の表で示す：

表 1 〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉の組み合わせ

初対面同士の会話								友人同士の会話			
目下との会話		目上との会話		同い年同士の会話				同い年同士の会話			
20代	30代	30代	40代	20代	20代	30代	30代	20代	20代	30代	30代
男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
女	男	女	男	女	女	女	女	女	女	女	女
女	女	女	女								

日本語、韓国語とも、上記の表の会話の組み合わせが各 2 組ずつ成立する。こうした組み合わせにより、日本語の会話 40 組と韓国語の会話 40 組、計 80 組の会話を構成した。

2.3 文字化

〈話されたことば〉の談話を分析するためには、瞬間的に消え去る話されたことばを、視覚化し、留めて置かなければならない。こうした〈話されたことば〉の視覚化は、談話の文字化を通してのみ得ることができる。実際に現れる言語のあり方を描写し、本質を捉えるのに、文字化はこれ無しではやり遂げることのできない、絶対不可欠な過程として存在する。

会話録音から得られたデータを、金珍娥(2004b,2006)の〈複線の文字化システム〉に従い文字化を行う。〈複線の文字化システム〉は、文字化の方法のみならず、日本語と韓国語の文字化における表記法、文字化における注釈の方法までを含めて金珍娥(2004b,2006)が提起している文字化システムである。

3. 文末のあり方の文法的概念規定：述語 — 用言の構造体

本稿では、〈話されたことば〉の談話を成す文の文末の姿を描き出すために、文末の核とされる述語の有無に注目する。亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996:689)では「述語」について「述語こそは文の核心をなす」とされており、「述語の中心となるものは動詞、または用言である」と述べている。

文末に現れる述語は、「간다」「行く」、「먹어요」「食べます」などのように単独の単語に語尾がついた形で独立して現れる場合もあるが、ここで1つ注意すべきことは、少なからず、「가겠지」「行くだろう」、「먹었는데요」「食べましたけれども」、あるいは「갈 수 있어요」「行くことができます」、「먹은 것 같아요」「食べたように思います」などのように述語の核となる単語に様々な要素が付随して現れるという点である。文末の構造体を探るためには、単一の単語としての述語にのみ注目するのではなく、様々な接辞や他の単語などからも構成される、文が終わるまでの末尾全体に注目しなければならない。

述語を含む、文末の部分を見るにあたっては、亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)で河野六郎が言う「用言複合体」と、菅野裕臣(1981,1988)、野間秀樹(1996b,2006)が言う「用言の総合的な形」“synthetic form”⁽⁶⁾、「用言の分析的な形」“analytic form”という観点を押さえておかねばならない。

例えば、「書かない」のように、動詞「書く」の語基「書カ-」に否定の助動詞「ナイ」がついた形や、「書카・세・라레・마세・ン・데シ・タ」のように複数の接辞(助動詞)がついて1つの構成体を成すものが「用言複合体」⁽⁷⁾である。노마히테키[野間秀樹](1996b:143,144)では、「用言の総合的な形」は「一単語の内部に種々の接尾辞、語尾が結合した形」(引用者訳)と述べ、「用言の分析的な形」については、「拡大節が1つにまとまり、用言の mood, modality の語形に成長したものがある。〈할 것이다〉(するだろう)、〈하는 것이다〉(するのだ)、〈할 것 같다〉(しそうだ)、〈할 수 있다〉(しうる)、〈하고 싶다〉(したい)、〈해도 되다〉(してもよい)などの多くの例がある」(引用者訳)と述べている。

以上を参考に、本稿では用言複合体、用言の総合的な形、用言の分析的な形と呼ばれる構造体まで含めて、「述語」という範疇でまとめて取り上げることにする。本稿における「述語」は次のように定義する：

述語：用言を核とする，用言複合体，ないしは用言の総合的な形，分析的な形からなる，
文を統合する，文の成分

4. 〈述語文〉と〈非述語文〉

実際の談話では，述語が，すべての文に常に現れるのだろうか。これを見るために本稿では文末の構造体を，さらに述語の有無という2つの軸から大別する。

4.1 述語の有無

文末が述語で統合されている文を〈述語文〉，文末が述語で統合されていない文を〈非述語文〉⁽⁸⁾とし，日本語と韓国語の談話を構成するすべての文を，述語文と非述語文に分類し，考察する：

表2 〈述語文〉と〈非述語文〉の類型

	述語文 (predicate sentence)	非述語文 (non-predicate sentence)
	文末が述語で統合されている文	文末が述語で統合されていない文
日本語	何を踊ってたんですか。	去年? — 今年。
韓国語	이탈리아어 막 까먹지 않아요? (イタリア語すぐ忘れませんか)	지금 막 막 패닉상태. (今パニック状態)

日本語と韓国語における〈非述語文〉の類型は，金珍娥（2006）によると，大きく〈間投詞系〉（「はいはい」，「そう」，「네」，「예」），〈名詞系〉（「中学受験」，「無理」，「아직 이십대」，「공민경이요」⁽⁹⁾），〈副詞系〉（「全然全然」，「どきどきで」，「아직까지는」，「살기가 너무」），〈接続詞系〉（「だから」，「그래서」），〈連体詞系〉（「どんな?」，「お仕事はどういう?」，「음악 들으면서 그런」，「장르는 어떤?」），〈助詞系〉（「かも」，「ね」）の6つの類型に分類することができる。日本語の終助詞「かも」や「ね」だけで終止する文は日本語に特徴的に現れる〈非述語文〉であり，韓国語には現れない。以下，〈述語文〉と〈非述語文〉の分布を確認する。

4.2 〈述語文〉と〈非述語文〉の分布

談話データにおける〈述語文〉と〈非述語文〉の分布を見てみよう：

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

表3 日本語における〈述語文〉と〈非述語文〉の頻度
(単位:文)

日 本 語		
初対面会話	述語文	2,767
	非述語文	3,512
	計	6,279
友人会話	述語文	1,145
	非述語文	1,646
	計	2,791
総 計		9,070

表4 韓国語における〈述語文〉と〈非述語文〉の頻度
(単位:文)

韓 国 語		
初対面会話	述語文	2,192
	非述語文	2,742
	計	4,934
友人会話	述語文	1,106
	非述語文	1,063
	計	2,169
総 計		7,103

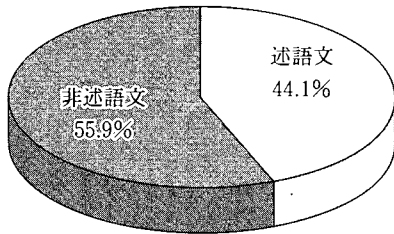


図1 〈初対面会話〉

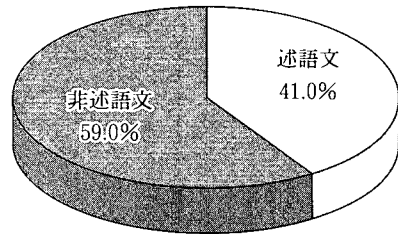


図2 〈友人会話〉

日本語の〈初対面会話〉と〈友人会話〉における〈述語文〉と〈非述語文〉の割合

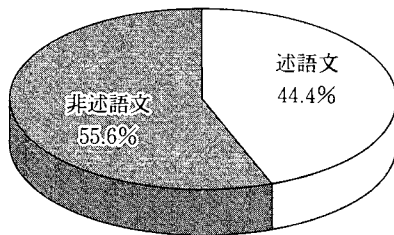


図3 〈初対面会話〉

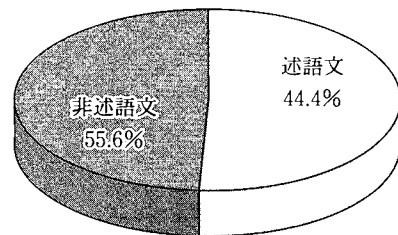


図4 〈友人会話〉

韓国語の〈初対面会話〉と〈友人会話〉における〈述語文〉と〈非述語文〉の割合

上のグラフを見ると、日本語も韓国語も〈非述語文〉がほぼ会話全体の半分以上を占めていることがわかる：

1. 日本語は、〈初対面同士の会話〉では述語文が44%、非述語文が56%、〈友人同士の会話〉では述語文が41%、非述語文が59%を占めている。
2. 日本語は、親疎の性格の異なる〈初対面同士〉と〈友人同士〉2つの会話においても〈非述語文〉が会話全体の半分以上を占める割合を見せている。

3. 日本語の〈友人同士の会話〉では〈初対面同士の会話〉よりも〈非述語文〉の使用率が若干多い。
4. 韓国語の〈初対面同士の会話〉では述語文が45%で、非述語文が55%を占めており、〈非述語文〉が会話全体の半分以上を占める割合を見せている。
5. 韓国語の〈友人同士の会話〉では述語文が51%、非述語文が49%を占めており、〈初対面同士の会話〉よりは〈非述語文〉の使用率が少ないものの、〈非述語文〉の使用は半分以上を占めている。

会話の中で、〈非述語文〉が〈述語文〉より多く用いられ、全体の会話の半分前後の割合を示しているという事実は、言語研究にとって極めて重要な意味を持つ。既存の文法は概して文においては〈主語－述語〉という要素の存在を、いわば暗黙の前提としている感がある。しかしながら、〈話されたことば〉にあっては、半分近くの文において少なくとも〈述語〉、文の〈核〉たる〈述語〉が存在しないのである。単に、会話の半分の文には述語が「省略」されたのだというような通り一遍の説明で済ますには、半数を超える文に述語が現れないという事実は、あまりにも重いといわねばならない⁽¹⁰⁾。

〈非述語文〉の厳然たる存在というこうした事実は、言語研究の前提そのものを一度問い返してみることを強く迫るものである。

5. 〈述語文〉と〈非述語文〉に現れた〈緩衝表現〉の類型

次に、述語の有無を軸とした、〈緩衝表現〉“buffering expression”の分布を考察する。述語文、非述語文、それぞれに現れた緩衝表現を次のように名づける：

非述語文を作る緩衝体 — 〈非述語文 buffer〉

述語文を作る緩衝体 — 〈述語文 buffer〉

まず、〈非述語文 buffer〉と〈述語文 buffer〉がどの品詞につくのかを基準とし、その類型⁽¹¹⁾を確認する。その後、話し手と聞き手の諸条件による〈緩衝表現〉の分布を考察する。ここで提示する類型は、金珍娥（2008b）を整理したものである。例えば、名詞類につく緩衝表現を〈体言につく buffer〉、動詞や形容詞などにつく緩衝表現を〈用言につく buffer〉と呼ぶことにする。

5.1 非述語文の〈緩衝表現〉の類型

〈非述語文 buffer〉の中で、〈体言につく buffer〉が最も多く現れている類型は、日本語では〈N{とか}〉系と、〈Nの{ほう}〉系である。韓国語では〈N{間投詞}〉系である。また〈用言につく buffer〉の最も多く現れている類型は、日本語も韓国語も後述の〈ぶら下がり文〉の類型である。

5.1.1 日本語のN{とか}系、Nの{ほう}系と、韓国語のN{間投詞}系

これらの類型は〈体言を緩衝化する〉例である：

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

・日本語：N {とか} 系

30代女	え？家事？。ああの私独身なんですけど。あの家事は 時々ですね、やっぱり。仕事持ってるので。
40代女	で、家事とかは？。 あ、えええ。

・日本語：Nの {ほう} 系

30代女	へ、でも男性もいらっしやる？。 えー、あでもそういう系だとやっぱり男性のほうが。
30代女	あ、います。 そうですね。

・韓国語：N {間投詞} 系

20代男	(もう何かまあまあなら。 専攻の授業は何かええ。 もうやっと 40 時間。) 이제, 뭐 웬만하면. 전공 수업은 뭐 예, 스, 이제 겨우 40 시간.
20代女	그럼, 전공 수업도 많이 들겠네요 (それじゃ、専攻の授業もけっこう取るでしょうね。)

5.1.2 日本語と韓国語の〈ぶら下がり文〉⁽¹²⁾

〈非述語文 buffer〉の中でも、〈用言につく buffer〉の最も多く現れている類型である。これらは〈用言を緩衝化する〉類型である：

・日本語における〈ぶら下がり文〉の例

30代男	あ———、すい、遅くなりましてすいません。
40代女	とー、どなたと私はお話しするのかなー、なんて。 いえいえ。と、とんでもないです。はい。

・日本語における〈ぶら下がり文〉の例

30代男	いや、東京の人は逆にあんまり出歩かないですよ、なんか。 ははは(笑) いや、僕の
40代男	そうかもしれないですよ。あの。

・韓国語における〈ぶら下がり文〉の例

30代男	(ちょっと若干がっかりしながら何か。 ええ。 そうですね、何か。) 좀 약간 실망을 하면서 그냥. 예. 그렇죠, 뭐.
40代女	예. 저는 딸이길 되게 기대했거든요. 근데 어쩔 수 없죠, 뭐. (はい。 私は女の子をとても期待してたもんですから。でも仕方ないでしょう、何か。)

5.1.3 日本語の〈間投詞を緩衝化する〉

日本語において注目すべき類型は、以下の例のように、〈間投詞を緩衝化する〉緩衝表現である。韓国語には現れない、日本語の〈緩衝表現〉の醍醐味である：

・日本語の〈間投詞を緩衝化する〉例

30代女	あ、そうなんですか。ん。 あ。え？ はは(笑)。え？とかって。(笑)
30代女	金町は去年の4月から 引越して。 その前が端っこの秋津って。 はは(笑)。 ところぎわの手前。

・日本語の〈間投詞を緩衝化する〉例

30代男	はははは(笑)。 あー。僕も
40代男	やっぱりもともとが、あの、ダウントウンのご出身、出身なので ああいう渋谷とか言われてもあーっていう感じ。

5.2 述語文の〈緩衝表現〉の類型

〈述語文 buffer〉は、日本語と韓国語の〈体言につく buffer〉と〈用言につく buffer〉に分け、提示する。

5.2.1 述語文における日本語の〈体言につく buffer〉の類型

〈体言につく buffer〉で、日本語に最も多く現れている類型はN {とか} 系, N {みたい} 系, N {って} 系である。それぞれの例を見てみよう：

・N {とか} 系

30代女	あ、あの、うかがっていいですか。 銀、銀行員の方とかなんですか。 そうじゃなくて？ すいません。
30代女	はい。 いや、違います違います。ぜんぜん。

・N {みたい} 系

20代男	学生さんですか。 あー、そうなんすか。 え-----。
30代男	今一応、派遣みたいな感じですよ。 学校行きながら派遣してるみたいな感じなんですよ。

・N {って} 系

20代女	あ。 人材系ってゆう感じなんですか。 はい。
30代男	普段やってるやつもこう業種が似てるんで。 はい。 あ、人材系じゃなくて教育系で こう生徒さんに

5.2.2 述語文における韓国語の〈体言につく buffer〉の類型

〈体言につく buffer〉で、韓国語に最も多く現れている類型は〈N 助詞 {代動詞}〉系, 〈N {있다}〉系, 〈N {같다}〉系である。それぞれの例を以下に挙げる：

・N 助詞 {代動詞} 系

30代女	(うん。 음. うん。 今私たちの年頃がそうみたいです。) 음. 지금 막 저희 때가 그런 거 같아요.
40代女	요즘에 그런 사람이 되게 부러워요. 결혼 안 하고 자기 일 하고. (最近はそのような人がとてもうらやましいです。結婚もせず自分の仕事をして。)

・N {있다} 系

20代男	(あの学会はただ一般的なコリアンポップスあるじゃないですか。それを歌う学会です。) 그 학회는 그냥 일반적인 우리나라 가요 있잖아요. 그거 부르는 학회에요.
20代男	그거 민중가요 부르는 거 아니에요?. (それ民衆の歌を歌うんじゃないですか。)

・N {같다} 系

40代男	(あ、以前ですか。) 아, 그전이에요?.
30代女	근데 보면 외모상으로 보시기에는 좀 운동하셨던 분 같아요?. 예. (でも見ると外見的にはちょっと運動をされていた方そうですね。 はい。)

5.2.3 述語文における日本語の〈用言につく buffer〉の類型

日本語における〈用言につく buffer〉の類型では、〈V{引用構造}〉系が最も多く、次が〈V{たり}〉系、〈V{みたい}〉系の順で現れている。まずは、「終止形+語尾」の結合を〈引用形〉と呼び、「終止形+語尾+引用動詞」からなる統辞論的構造を〈引用構造〉と呼ぶことにし、これらの例を見てみよう：

・「終止形+語尾」の〈引用形〉からなる緩衝表現

30代女	いろんな国の人がいて。 なんかすごい。あ、なんか、すごい日本ってちっちゃいんだなーって。
20代女	そうですね。 あー。

・「終止形+語尾+引用動詞」の〈引用構造〉から緩衝表現

30代女	うーーん。 うーーん。
40代男	店、店舗の中の衛生検査で帰って帰って検査してもらうっていう。ええ、形の仕事なんですよ。

・

30代女	そうそうそう。 そうですね。 そうですね。
40代女	1時間半だとしたら私ちょっとうれしいです。自分だけじゃないと思って。はははは(笑)。

・

20代女	また方向性が変わってきたんですけど。でも何か、未来がないっていうか。
20代男	あー。 あー、そうですか。

・

20代女	え、何を話せばいいんだろう。(笑い) うんうんうんうん。今、部活で
20代女	えー。 ふふふ(笑)。何か普通の会話でいいとか言って。 えっとー。

次は、〈V{たり}〉系、〈V{みたい}〉系の例を確認する：

・V{たり}系

30代女	あ。 あ、そうなんですか。
40代女	会社のほうの会報とか、そういった機関紙とかを作ったりとかしてるんですね。 はい。

・V{みたい}系

30代男	学生さんですか。 あー、そうなんですか。 えー。
20代男	今一応、派遣みたいな感じですか。 学校行きながら派遣してるみたいな感じなんですよ。

・V{みたい}系

30代女	なんで。そうそうそう。もったいないみたいな。1万円消えてるみたいな。
30代男	おっしゃるとおり。 ね～。なんで ま、知ってる人か

5.2.4 述語文における韓国語の〈用言につく buffer〉の類型

韓国語における〈用言につく buffer〉の類型は、〈V{더라고요}〉系が最も多く、〈V{거 같다}〉系、〈V{引用構造}〉系の順で用いられている。まずは、最も多い〈緩衝表現〉の類型になっている体験法の引用形である「用言+더라고요」⁽¹³⁾(してましたよ)という類型に注目したい：

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

・「用言+더라고요」

30代男	(産むときあの枕元にいたけれど、ぱっと出てわ ぱっと見たけど かわいかったですよ.) 남을 때 그 머리 밑에 있었는데. 딱 나오는데 하 딱 봤는데. 이쁘더라고요.
40代女	음. 그럼 와이프가 이쁘게 생기셨나 보다. (うん。 それじゃ奥さんがかわいいでしょうね。)

・

20代男	(他の科だからだめだと思ったんだけどメールが来たんですよ.) 타과니까 안 될 줄 알았는데 문자가 오더라고요.
20代女	으응. (うーん。)

次はV {거 같다} 系である：

・V {거 같다} 系

30代女	(結婚は去年一昨年になりましたけど。あの赤ちゃん その赤ちゃん。 ええ.) 결혼은 작년 재작년에 했거든요. 그 얘기 바로 얘기. 예.
30代女	아-. 딱 좋게 하신 거 같네요. 그런 거 같아요. (아, ちょうどよくなかったみたいですね。 そうみたいです네。)

次に、韓国語の〈用言につく buffer〉の種類の中で、3番目に多く現れている〈緩衝表現〉は、「한다体の終止形+語尾+引用動詞」からなる引用構造である。〈V{引用構造}〉系の類型は、日本語より多様な形で現れている点が特徴的である。

「한다体の終止形+語尾」からなる、以下の例のような〈引用形〉の表現から見てみよう：

・「終止形+語尾」からなる〈引用形〉の〈緩衝表現〉

30代男	(あー。男の子を先に生んだほうが楽だ.) 아-. 아들이 먼저 나와야지 편하다.
30代男	아들이 먼저 낳아 나와야 마음이 편하다고요. 그래 갖고 보험든다 그래 가지구 와이프는 그러더라고요. (男の子を先に産んでおいたほうが心が楽ですって。それでもって保険に入るとして妻はそうやってたんですよ。)

「한다体の終止形+語尾+引用動詞」の〈引用構造〉の〈緩衝表現〉を見てみよう：

・「終止形+語尾+引用動詞」からなる〈引用構造〉の〈緩衝表現〉

30代男	(あのもともと私も聞いた話ですが.) 이 원래 저도 들은 얘기인데요.
30代男	전 딸을 택할라구 하는데도 죽어도 아들이 낳아야 된다고 그래 갖고. 네. (私は女の子をほしいと思ったけど死んでも男の子を産まなければならないと。はい。)

実際の談話の中では、한다体の終止形の後ろに語尾がなく、直接引用動詞に続く、「그렇다 그래요」(lit: そうだφ言います=そうだとおっしゃいます)のような、引用構造の緩衝表現もある：

・語尾が現れない「한다体の終止形+引用動詞」の〈引用動詞〉

30代男	(え, 見るにはとてもお若く見えますが。はは(笑)。 はい。 ははは(笑)。 어, 보기엔 굉장히 젊어 보이시는데, 하하(웃). 예, 아하하(웃).
40代女	그렇죠?. 다들 그렇다 그래요. 호호(웃). 전 마흔 셋이에요. (そうでしょう? みんなそうだと行ってますよ。はは(笑) 私は43歳です。)

20代女	(はは(笑)。 (人名)もすごくかっこいいし。 하하(웃). (인명)도 너무 멋있구.
20代女	슬픈데 나는 그런 게 없으니까. 하하(웃). 그렇게 저게 뭐야 막 이러면서. (悲しいけど私はそういうの無いから。はは(笑)。そんなにあれ何よ, とかいて。)

また, 引用終止形も, 例は多くないが, 実際の話伝えるものではなく, 一般的な事実として語る緩衝表現としても用いられている:

・〈引用終止文〉での〈緩衝表現〉

30代男	(そうすると女の子が産れたときその喜びがもっと大きいですって。何か男の子が産れるとあ, 男の子産まれたんだっていうんだって。) 그래야지 딸을 낳았을때 그 기쁨이 더 많대요. 뭐 아들 나면 아이 아들 낳는구나 그런데.
30代男	네-. 으 저는 근대. 흐-. 제가 그런 쪽인데. (はい。 ん, 私はでも。 ふふ, 私がそうなんだけど。)

韓国語の「한다体の終止形+語尾+引用動詞の働きをする構造体」による〈引用構造〉もある。いまひとつは被引用部に引用動詞の働きをする構造体が後続するものである。典型的には以下の例にも見えるように, 「한다는 소리를 듣다」(lit: するという声を聞く), 「하는 줄 알다」(lit: することと知る), 「한다는 느낌이 들다」(lit: するという感じがする), 「한다는 얘기가 있다」(lit: するという話がある)などがある。そうした意味では, 例えば「한다는 소리를 듣다」全体が1つの引用動詞としての働きをする「構造体」, 引用動詞の代わりをする「構造体」であると見ることができる:

・「終止形+語尾+引用動詞の働きをする構造体」による〈引用構造〉の〈緩衝表現〉

40代女	(かなり, かなり 照れるわね え。 え。 結婚なさいましたか。) 되 게, 되 게 쑥스럽네. 예. 예. 결혼하셨어요?.
30代女	무슨 얘기를 해야 되는지. 예예. 저는 이렇게 상황이 설정되는 건 줄 알았는데. 뭐라고. (何の話をするればいいのか。ええ。私はこういう状況が設定されるものだと思っていたのに。何んて。)

40代女	(ああ。 それじゃ 小学校の先生でいらっしゃいますか。) 아아. 그러면은 초등학교 선생님이세요?.
30代女	좀 애들이랑 다녀서 그런지 좀 어려 보인다는 소리를 많이 들어요. (ちょっと子供たちと一緒にいるせいかどうか ちょっと若く見るとよく言われます。)

5.3 その他の述語文に現れる〈緩衝表現〉

以上、日本語と韓国語の〈体言につく buffer〉と〈用言につく buffer〉の類型の中で、最も多く現れた3つの〈緩衝表現〉の類型を中心に見た。ここでは上記の類型以外の類型を簡単に提示する。詳細は金珍娥(2008ab)を参照されたい。

5.3.1 〈連体形終止文〉⁽¹⁴⁾

・日本語

20代男	今度大学を卒業して、で、その大学院のほうに。	いえいえ、そんな(笑)。	いや、いえいえ。
30代男	あー。	あ、すごいじゃないですか。	優秀な。

・韓国語

20代男	(君は何が欲しいの? うん。 넌 뭐 갖고 싶은데? 응.)	香水の何? 향수 뭐?	さっぱりした香り 시원한 향
20代女	나? (私? 어-, 향수. (うーん, 香水.(私? うーん, 香水.)	그냥 시원한 향 나는. ただのさっぱりした香りする.)	

5.3.2 日本語における〈Vて{て}系〉の〈緩衝表現〉

・Vて{て}系

20代女	うん。	んー, 聞いたの?	あはは(笑) すっごい気になるよね。
20代男	どういう所	デートしに行くの?とかクラスの人のみんなまでメールしてて。	

・

20代女	久しぶりに会って、どうしてる?とか、うまくいってる?とか言って言ったら、あ、うん、別れたよ、とか言って言ってる。	
20代男		ははは(笑)

5.3.3 日本語の〈N・V{じゃない}系〉, 〈V{ない}系〉と韓国語の〈하지 않아? (しない)系〉

・日本語

20代男	あーー。	え?すごい?それ(笑)。
20代男	吉祥寺まで30分か40分ぐらいで。	自転車漕いで、ショートカットで来て。 超つらい。

・韓国語

20代女	(冗談じゃないって。すごいよ。能力ほんとすごい。すごい?) 장난 아니야. 짱이야. 능력 짱 좋아. 장난 아니지 않냐?	
20代女		우리 이런 얘기해도 되는 거지? (うちらこんな話してもいいの?)

5.3.4 韓国語の〈分析的な形〉による〈緩衝表現〉

・〈해 가지고 (しといて) 型〉

30代男	(いらっしゃるのに道が混みませんでしたか?) 오시는 데 차 안 막히셨어요?
30代男	예. 저는 괜찮아요. 밑에 바로 저이 사무실이 돼 가지구. (はい。私は平気です。下にすぐうちの事務室になってるもので。)

・〈하고 그러다 (したりする) 型〉

30代男	(どうしようもなく。へへへ(笑)。サークルみたいなのもやってそれでもって。) 어쩔 수 없어. 헤헤헤(웃). 동아리 같은 것도 하고 그래 가지고.
20代男	막 그런 그런 것 같아요. (ほんととそんな、そうみたいですね。)

・〈하고 하다 (したりする) 型〉

20代男	(もう楽にお話ください。どうぞ私が後輩だし。楽にお話ください。後輩なわけですから。ええ。) 이제 편히 말 놓으세요. 어차피 제가 후배고. 말 놓으세요. 후배고 하니깐. 예.
20代女	어?. 아, 네. (え? あ, ええ。)

・〈하는/한 게 있다 (するのがある) 型〉

20代女	(うん。うん。うん。) 어. 어. 어.
20代女	원래 일본 영화가 좀 약간 지루한 그런 게 있잖아. 나 '영화명' 봤거든. (もともと日本の映画がちょっと退屈なそういうのあるじゃん。私(映画名)見たんだけど。)

5.3.5 韓国語の代動詞〈그러다 (そうする。ああする) 型〉による〈緩衝表現〉

30代女	(ああ、私も(地名)で、ああ(地名)でそれでやたらとそうしてですね。今はなに彼氏いますか?) 어, 저두 잠실에서, 영 잠실에서 그래서 막 그랬구요, 지금 뭐 남자친구 있으세요?
30代女	거기구요?. 어영. (そこででもですか? ああ。)

5.3.6 複合緩衝体による〈緩衝表現〉

日本語にも韓国語にも、驚くべきことに、〈緩衝体〉が3つ、4つも続いて現れる表現が多く存在する。金珍娥(2008b:105)では、これらを〈複合緩衝体〉と名付け、次のように定義した:

〈複合緩衝体〉= 複数の〈緩衝体〉が重なった〈緩衝表現〉

いろいろな類型が交わって現れる〈複合緩衝体〉による、日本語と韓国語の〈緩衝表現〉には以下のようなものがある:

〈日本語の〈複合緩衝体〉の例〉

・管理がずさんになっ {たり} とか} してんのかな} とか} 思っ たんですけど。

30代女	けっこうね、そういうチェーンになったほうが、管理がずさんになったりとかしてんのかなとか思ったんですけど。	
40代男	えー。	いや、そう。

〈韓国語の〈複合緩衝体〉の例〉

・제가 하지 않아두 {그냥} 좀} 그런} 생각이 들} 기는 하} 는데요

30代女	(思いただ何か、私がしなくてもただちょっとそのようなことを思ったりはしますけれども。) 생각 그냥 뭐, 제가 하지 않아두 그냥 좀 그런 생각이 들기는 하는데요.	
40代男	잘 안 맞을 거예요. 답답할 거라구. (あまり合わないと思いますよ。窮屈でしょうね。)	

本研究で注目している〈複合緩衝体〉は、〈書かれたことば〉に見出しにくい、実際の〈話されたことば〉の自由さを見せてくれる類型だと言えよう。

6. 〈述語文 buffer〉と〈非述語文 buffer〉の分布

日本語と韓国語の初対面同士の会話と友人同士の会話に現れた、〈述語文〉と〈非述語文〉、〈述語文 buffer〉と〈非述語文 buffer〉の分布は以下のとおりである：

表 5 日本語と韓国語の〈述語文〉と〈非述語文〉、〈述語文 buffer〉と〈非述語文 buffer〉の数

(単位：文)

	日 本 語				韓 国 語			
	述語文	2,767	述語文 buffer	405	述語文	2,192	述語文 buffer	382
初 対 面 会 話	非述語文	3,512	非述語文 buffer	155	非述語文	2,742	非述語文 buffer	101
	述語文	1,145	述語文 buffer	199	述語文	1,106	述語文 buffer	153
友 人 会 話	非述語文	1,646	非述語文 buffer	75	非述語文	1,063	非述語文 buffer	28
	計	9,070		835	計	7,103		664

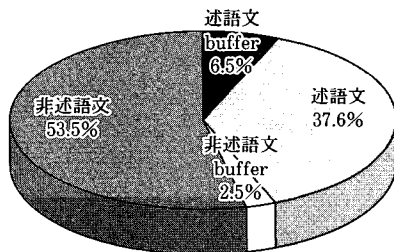


図 5 初対面会話

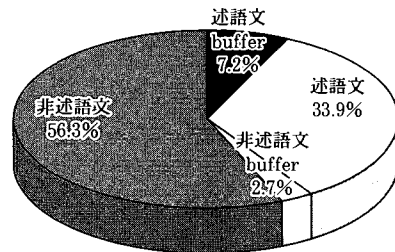


図 6 友人会話

日本語における述語文、述語文 buffer、非述語文、非述語文 buffer の割合

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

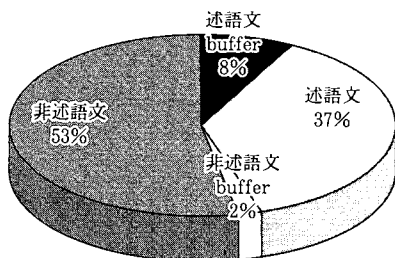


図7 初対面会話

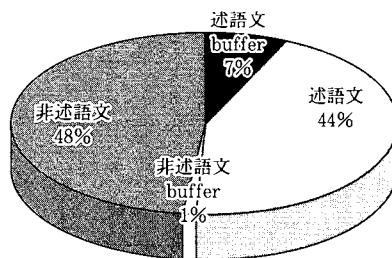


図8 友人会話

韓国語における述語文、述語文 buffer、非述語文、非述語文 buffer の割合

上のグラフを見ると、両言語共に、どの会話においても、10%ほどは〈緩衝表現〉を用いているということがわかる：

1. 日本語の〈初対面同士の会話〉では、全体 6,279 文のうち、〈述語文 buffer〉は 405 文、6%、〈非述語文 buffer〉は 155 文、3%を占める。
2. 日本語の〈友人同士の会話〉では、全体 2,791 文のうち、〈述語文 buffer〉が 200 文、7%、〈非述語文 buffer〉が 75 文、3%を占めている。
3. 日本語は、親疎の度合いの異なる〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉の2種類の会話において、〈緩衝表現〉の使用率は、ほぼ同一の分布を見せている。
4. 韓国語の〈初対面同士の会話〉では、全体の 4,934 文のうち、〈述語文 buffer〉が 382 文、8%、〈非述語文 buffer〉が 101 文、2%を占めている。
5. 韓国語の〈友人同士の会話〉では、全体の 2,169 文のうち、〈述語文 buffer〉が 153 文の7%、〈非述語文 buffer〉が 28 文の1%を占めている。
6. 韓国語は、親疎の度合いの異なる〈初対面同士の会話〉と、〈友人同士の会話〉の2種類の会話において、〈緩衝表現〉の使用率は、ほぼ同一の分布を見せている。

7. 話し手と聞き手の条件別の〈緩衝表現〉の使用率

ここでは話し手と聞き手の、世代別と性別ごとの〈緩衝表現〉の使用率に注目する。どのような話者が、どのような相手と話すとき、どのような変化が現れるのか、話し手と聞き手の属性による〈緩衝表現〉の使用を見るためである。ここでは主に文が現れる頻度と割合を基準にして検討する。

7.1 初対面の性別の違いによる〈緩衝表現〉の使用率の違い

緩衝表現の使用は話し手の性別と関わりがあるのだろうか。ここでは同年代で性別が同じ、20代と30代の会話から、女性と男性はどのような違いを見せるのかを見る。日本語と韓国語を対照してみよう：

表 6 日本語の 20 代と 30 代の女性同士と男性同士の会話

	20 代		30 代	
	女性同士	男性同士	女性同士	男性同士
文数	525	491	489	403
buffer 文数	43	48	37	34

表 7 韓国語の 20 代と 30 代の女性同士と男性同士の会話

	20 代		30 代	
	女性同士	男性同士	女性同士	男性同士
文数	428	304	343	303
buffer 文数	41	53	45	43

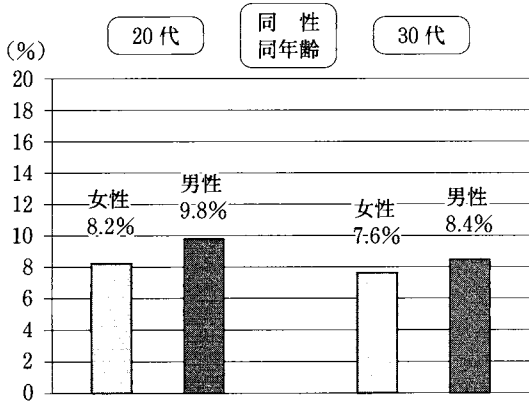


図 9 日本語の 20 代と 30 代の女性同士と男性同士の会話からの buffer の割合

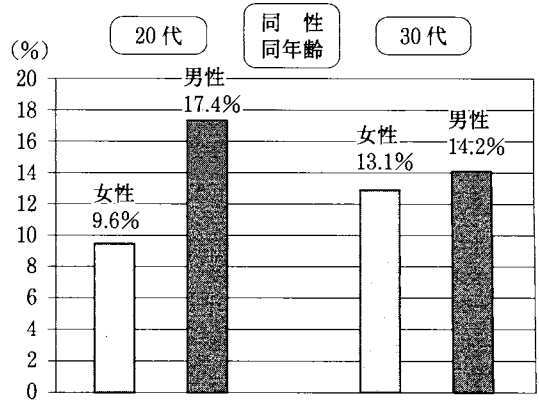


図 10 韓国語の 20 代と 30 代の女性同士と男性同士の会話からの buffer の割合

上の表とグラフから、初対面の同年代の同性同士の会話においては、次のことが言えよう：

1. 日本語も韓国語も共にまんべんなく緩衝表現が用いられている。
2. 比較すると韓国語が日本語より緩衝表現を多用している。
3. 韓国語の 20 代男性同士の緩衝表現の使用が目立つ。

次に、異性同士の会話から緩衝表現の男女の使用量の違いを探ってみる：

表 8 日本語：20 代と 30 代の女性と男性の会話

	20 代		30 代	
	女性	男性	女性	男性
文数	217	191	240	210
buffer 文数	30	23	25	16

表 9 韓国語：20 代と 30 代の女性と男性の会話

	20 代		30 代	
	女性	男性	女性	男性
文数	174	188	178	169
buffer 文数	15	28	22	26

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

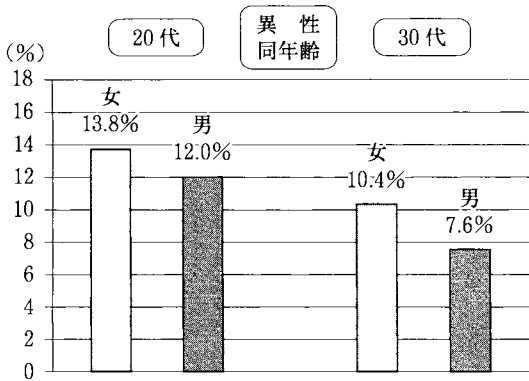


図 11 日本語の20代と30代の女性と男性の会話からのbufferの割合

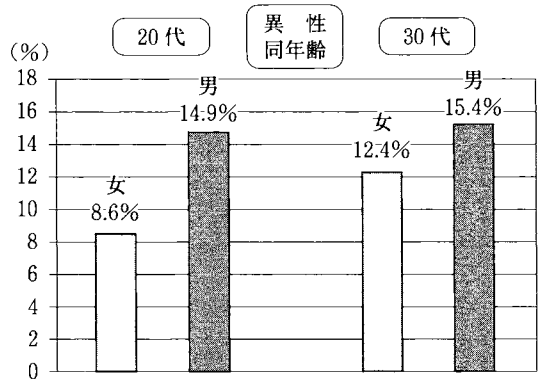


図 12 韓国語の20代と30代の女性の男性の会話からのbufferの割合

初対面の同年代の異性に対する会話においては、日本語と韓国語は対照的な結果が得られた。上の表とグラフから、初対面の同等の年齢の異性に対する会話においては、次のことが言えよう：

1. 日本語は同性同士より異性同士で緩衝表現を多用する傾向がある。
2. 韓国語は同性同士でも異性同士でも緩衝表現が多用される。
3. 日本語は20代女性と男性が、異性に対してとりわけ多用する。30代になると減っている。
4. 韓国語は20代も30代も多用する。
5. 日本語は20代も30代も女性が同性同士より、異性である男性に対して多用する。
6. 韓国語は20代も30代も男性が同性同士でも、異性の女性に対しても多用する。

日本語では、女性が男性に対してより緩衝表現を用い、韓国語では、男性が女性より緩衝的な表現を多く用いるといえる。

7.2 初対面の年齢の差による〈緩衝表現〉の使用頻度の違い

緩衝表現の使用は、話し手と聞き手の年齢との相関関係はあるのだろうか。この点について、年齢の差がある、〈30代と20代の会話〉と〈40代と30代の会話〉を見てみよう。

まず、日本語における〈30代と20代の会話〉を見てみよう：

表 10 日本語の初対面30代と20代の会話における文数とbuffer数

文数	述語文	非述語文	述語文 buffer	非述語文 buffer	総 buffer 文数
1,880	900	980	117	32	149

表 11 日本語の初対面 30 代と 20 代の会話における各話者別の文数と buffer 数

	会話 1		会話 2		会話 3		会話 4	
	30 代女性	20 代女性	30 代女性	20 代男性	30 代男性	20 代女性	30 代男性	20 代男性
話者別 buffer 文数	29	8	16	19	23	14	27	13
割合	12.3%	2.9%	7.1%	8.5%	8.1%	5.3%	15.2%	6.7%
話者別文数	236	275	226	224	283	264	178	194

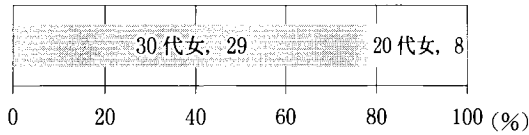


図 13 日本語の初対面 30 代女性と 20 代女性の buffer の割合

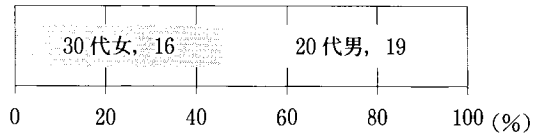


図 14 日本語の初対面 30 代女性と 20 代男性の buffer の割合

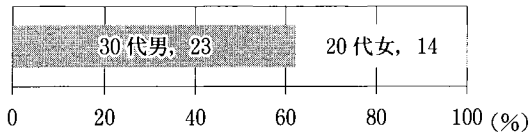


図 15 日本語の初対面 30 代男性と 20 代女性の buffer の割合

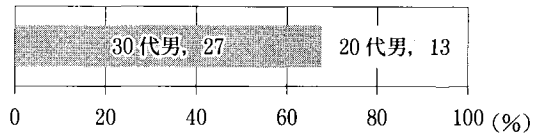


図 16 日本語の初対面 30 代男性と 20 代男性の buffer の割合

上のグラフから次のことが見てとれる：

日本語は、30 代女性と 30 代男性が、同性である 20 代女性と 20 代男性に対して緩衝表現をとりわけ多用する

同性同士の年上と年下の会話において、年上の年齢による power が緩衝表現により影響を与えているものと考えられる。

次に、韓国語における 30 代と 20 代の会話を考察する：

表 12 韓国語の初対面 30 代と 20 代の会話における総文数

文数	述語文	非述語文	述語文 buffer	非述語文 buffer	総 buffer 文数
1,521	642	879	86	30	116

表 13 韓国語の初対面 30 代と 20 代の会話における各話者別の文数と〈緩衝表現〉の数

	会話 1		会話 2		会話 3		会話 4	
	30 代女性	20 代女性	30 代女性	20 代男性	30 代男性	20 代女性	30 代男性	20 代男性
話者別 buffer 文数	16	17	19	15	10	11	20	8
割合	7.9%	8.5%	7.1%	8.4%	6.1%	5.9%	11.7%	5.3%
話者別文数	203	199	269	178	163	188	171	150

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

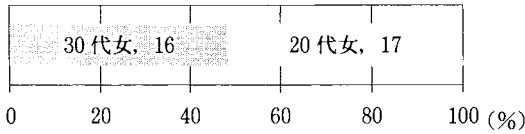


図 17 韓国語の初対面 30 代女性と 20 代女性の buffer の割合

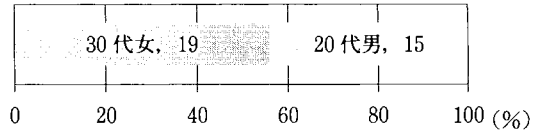


図 18 韓国語の初対面 30 代女性と 20 代男性の buffer の割合

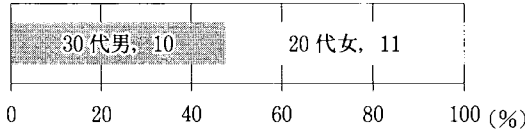


図 19 韓国語の初対面 30 代男性と 20 代女性の buffer の割合

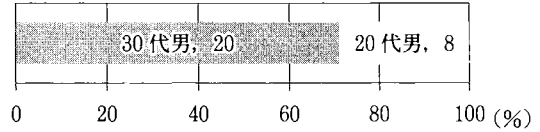


図 20 韓国語の初対面 30 代男性と 20 代男性の buffer の割合

上のグラフから次のことが見てとれる：

1. 韓国語は、30代と20代の話者がおよそ半分ずつ緩衝表現を用いている。
2. 30代男性の20代女性に対する緩衝表現の多用が目立つ。

緩衝表現は男性同士で、より年齢の power の違いが認識されているのかもしれない。

次に、日本語における40代と30代の会話を考察する：

表 14 日本語の初対面 40 代と 30 代の会話における総文数

文数	述語文	非述語文	述語文 buffer	非述語文 buffer	総 buffer 文数
1,633	677	956	120	34	154

表 15 日本語の初対面 40 代と 30 代の会話における各話者別の文数と〈緩衝表現〉の数

	会話 1		会話 2		会話 3		会話 4	
	40代女性	30代女性	40代女性	30代男性	40代男性	30代女性	40代男性	30代男性
話者別 buffer 数	18	14	17	14	30	13	32	16
割合	10.7%	7.2%	8.8%	7.7%	13.8%	5.1%	15.5%	7.4%
話者別文数	168	194	194	182	218	254	207	216

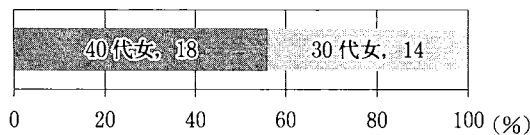


図 21 日本語の初対面 40 代女性と 30 代女性の buffer の割合

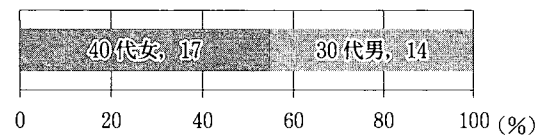


図 22 日本語の初対面 40 代女性と 30 代男性の buffer の割合

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

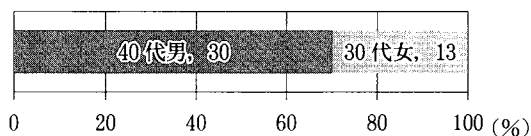


図 23 日本語の初対面 40 代男性と 30 代女性の buffer の割合

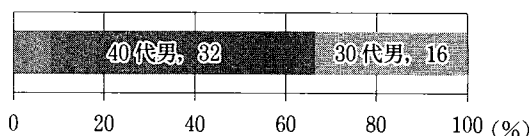


図 24 日本語の初対面 40 代男性と 30 代男性の buffer の割合

上のグラフから次のことが見てとれる：

1. 日本語は 40 代の話者が 30 代の話者に対し、緩衝表現を多用する。
2. とりわけ 40 代男性は 30 代の女性と男性に対する、緩衝表現の多用が目立つ。

年上の男性の話者が緩衝的な表現を最も多く用いているものと考えられる。

次に、韓国語における 40 代と 30 代の会話を考察する：

表 16 韓国語の初対面 40 代と 30 代の会話における総文数

文数	述語文	非述語文	述語文 buffer	非述語文 buffer	総 buffer 文数
1,326	599	727	70	24	94

表 17 韓国語の初対面 40 代と 30 代の会話における各話者別の文数と〈緩衝表現〉の数

	会話 1		会話 2		会話 3		会話 4	
	40 代女性	30 代女性	40 代女性	30 代男性	40 代男性	30 代女性	40 代男性	30 代男性
話者別 buffer 数	8	10	9	17	10	17	7	16
割合	3.9%	4.7%	5.2%	8.5%	7.6%	12.0%	5.5%	11.7%
話者別文数	204	213	173	199	131	142	127	137

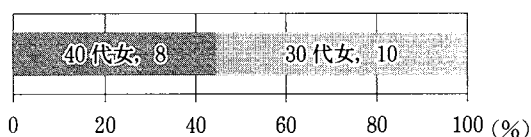


図 25 韓国語の初対面 40 代女性と 30 代女性の buffer の割合

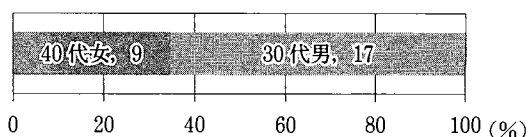


図 26 韓国語の初対面 40 代女性と 30 代男性の buffer の割合

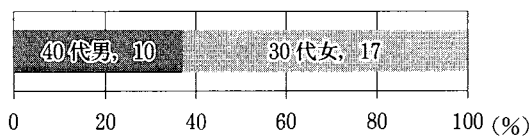


図 27 韓国語の初対面 40 代男性と 30 代女性の buffer の割合

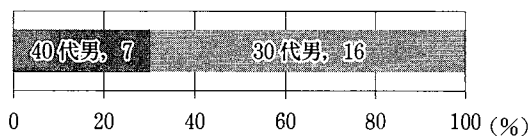


図 28 韓国語の初対面 40 代男性と 30 代男性の buffer の割合

上のグラフから次のことが見てとれる。日本語とは対照的な結果を示しており、注目すべき結果である：

韓国語は、全体的に40代の話者が、30代の話者に対し、緩衝表現の使用が少ない。

40代の話者による〈緩衝表現〉の使用が少ないということは、あまり緩衝表現を使用せず、直接的な表現を用いているとも解釈できる。日本語とはまた異なる年齢のpowerによる〈緩衝表現〉の違いが現れていると言える。

7.3 性別差と年齢差からの〈緩衝表現〉

ここまでは2人の話者の性別と年齢を中心に、どの話者がどの話者に対して〈緩衝表現〉をどのくらい用いているのか、各条件別の考察を行った。日本語と韓国語は大変興味深い対照的な結果を示している。緩衝表現が用いられる傾向を、次のようにまとめることができる：

表 18 性別差と年齢差からの〈緩衝表現〉使用率の傾向

	日本語	韓国語
同性同士の会話	男性が多用	男性が多用
異性同士の会話	男性に対して女性が多用	女性に対して男性が多用
年齢の差がある会話	年上の話者が多用	年下の話者が多用

1. 日本語は、異性に対して女性が、年下に対して年上話者が、緩衝表現を多用する。
2. 韓国語は、異性に対して男性が、年上に対して年下話者が、緩衝表現を多用する。

7.4 世代別に見える〈緩衝表現〉

相手の話者に関わりなく、世代別の、すなわち20代と30代、40代の話者の全文数における〈緩衝表現〉の使用率を検討してみる。40代話者の文数は、40代同士の会話の構成がないので、20代と30代話者の全文数よりは少ない。しかし、割合を見ることで、言語使用における、ある程度の傾向は見出しうるであろう：

表 19 日本語の世代別に見える〈緩衝表現〉の使用率

	総文数	buffer 文数	割合
20代女性	1,281	95	7.4%
20代男性	1,100	103	9.4%
30代女性	1,639	134	8.2%
30代男性	1,472	130	8.8%
40代女性	362	35	9.7%
40代男性	425	62	14.6%

表 20 韓国語の世代別に見える〈緩衝表現〉の使用率

	総文数	buffer 文数	割合
20代女性	865	84	9.7%
20代男性	820	104	12.7%
30代女性	1,348	129	9.6%
30代男性	1,142	132	11.6%
40代女性	377	17	4.5%
40代男性	258	17	6.6%

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

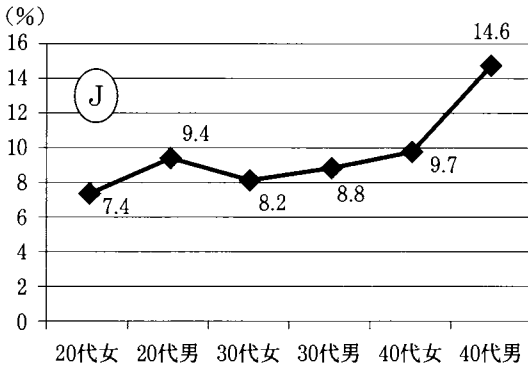


図 29 日本語の世代別に見える〈緩衝表現〉の使用率

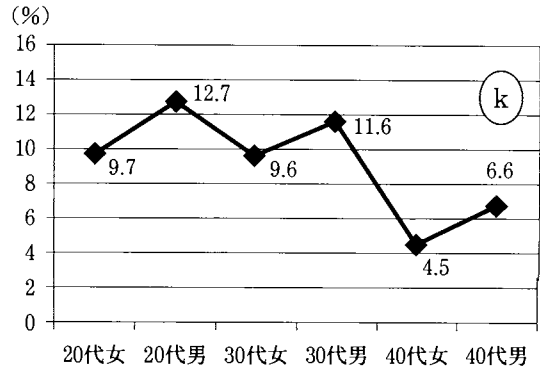


図 30 韓国語の世代別に見える〈緩衝表現〉の使用率

世代別による日本語と韓国語の〈緩衝表現〉の対照的な使用が一目瞭然に現れた。上のグラフから見てみよう：

1. 日本語は 20 代から 40 代へ行くほど、〈緩衝表現〉の使用率が上がっていく
2. 韓国語は 20 代から 40 代へ行くほど、〈緩衝表現〉の使用率が下がっていく。
3. 韓国語においては、女性よりは男性の使用が目立つほど多い。
4. 日本語は年上の話者が多用し、とりわけ 40 代男性の〈緩衝表現〉の使用率が最も多い。
5. 韓国語は年上の話者が最も低く、とりわけ 40 代女性の〈緩衝表現〉の使用率の低さが目立つ

日本語は、年上の話者のほうが、とりわけ 40 代男性が最も緩衝表現を用いる。

韓国語は、年下の話者のほうが、〈緩衝表現〉を好んでいると言える。とりわけ 40 代女性の話者が、最も緩衝表現を用いない結果は興味深い。

7.5 親疎から見た〈緩衝表現〉

20 代同士と 30 代同士の同じ年齢同士での会話において、親疎の度合が異なる〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉では、〈緩衝表現〉はどのような違いが現れるのだろうか。

男女別の 20 代の同じ年齢の 2 人の会話と、男女別の 30 代の同じ年齢の 2 人の会話の総文数からその差を検討してみよう：

表 21 日本語の 20 代同士と 30 代同士の会話に現れた〈緩衝表現〉の割合

	総文数	buffer 文数	buffer の割合
初対面 20 代同士	1424	144	10.1%
友人 20 代同士	1513	157	10.4%
初対面 30 代同士	1342	112	8.3%
友人 30 代同士	1278	118	9.2%

表 22 韓国語の 20 代同士と 30 代同士の会話に現れた〈緩衝表現〉の割合

	総文数	buffer 文数	buffer の割合
初対面 20 代同士	1,094	137	12.5%
友人 20 代同士	1,113	100	9.0%
初対面 30 代同士	993	136	13.7%
友人 30 代同士	1,056	81	7.7%

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

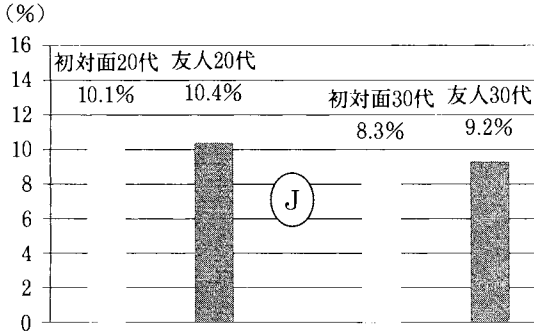


図 31 日本語の 20 代同士と 30 代同士の会話に現れた〈緩衝表現〉の割合

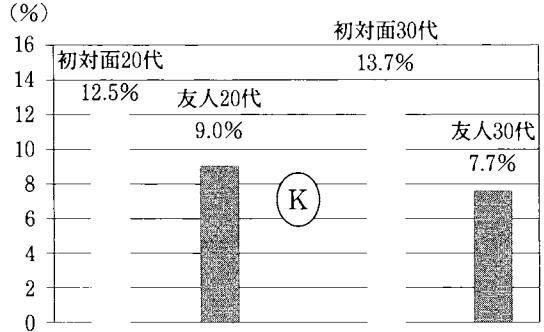


図 32 韓国語の 20 代同士と 30 代同士の会話に現れた〈緩衝表現〉の割合

親疎の関係の違いによる緩衝表現の違いは、上のグラフから次のことが見てとれる：

1. 日本語においては〈20代同士の会話〉と〈30代同士の会話〉ともに、〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉に、大きな違いはない
2. 韓国語においては〈20代同士の会話〉と〈30代同士の会話〉ともに、〈初対面同士の会話〉に〈友人同士の会話〉より〈緩衝表現〉が多用される

日本語においては、同じ年齢であれば初対面の相手に対しても、親しい相手に対しても緩衝表現の使用にあまり大きな違いがない。

韓国語においては、同じ年齢でも、初対面の相手に対し〈緩衝表現〉が多用される。

8. 終りに — 談話を成す不可欠の要素としての〈緩衝表現〉

本稿は日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話を成す〈文〉の文末に現れる〈緩衝表現〉の分布を、談話データから考察した。日本語会話 40 組、韓国語会話 40 組、計 80 組の〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉という場面別の〈自由会話〉を談話データとして用いている。東京方言話者とソウル方言話者に制限された、20 代、30 代、40 代の男女の異なり人数で日本語母語話者が 80 名、韓国語母語話者が 80 名の計 160 名からなるデータである。

談話を構成する文を〈述語文〉と〈非述語文〉に分類した結果、日本語も韓国語も〈非述語文〉が会話全体の半分以上を占めているという重要な言語事実を得た。

会話の中で、〈非述語文〉が〈述語文〉より多く、全体の半分を示しているという事実は、〈主語－述語〉という要素の組み合わせを、いわば暗黙の前提としている既存の文法に大きな疑問を投げかける。〈話されたことば〉にあっては、半分近くの文において少なくとも〈述語〉、文の〈核〉たる〈述語〉が存在しないのである。こうした〈非述語文〉の厳然たる存在は、文にまつわる言語研究の前提そのもの

を一度問い返す必要を示唆してくれるのである。

また、〈剰余構造〉と〈欠如構造〉の〈過不足構造〉による〈緩衝表現〉“buffering expression”が、話し手と聞き手の条件によってどのように現れるのか、〈話されたことば〉における〈緩衝表現〉の出現の様相はいかなるものであるのかを考察した。日本語と韓国語の〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉において、緩衝表現の割合を調べ、最も重要なのは次の点である：

1. 両言語共に、どの会話においても、10%ほどの文で〈緩衝表現〉を用いている。

この事実は〈緩衝表現〉が、実際の談話においてはなくてはならない、不可欠の要素であることを示している。〈緩衝表現〉はたまたま現れたといった類の表現ではなく、談話において確固たる位置を占めているのである。そしておそらくそのデバイスに差はありこそすれ、すべての世代に貫徹する普遍的な表現であることを予想させるのである。

2. 日本語は、異性に対して女性が、年下に対して年上話者が、緩衝表現を多用する。
3. 韓国語は、異性に対して男性が、年上に対して年下話者が、緩衝表現を多用する。
4. 世代別において日本語は20代から40代へ行くほど、〈緩衝表現〉の使用率が高くなる。
5. 韓国語は20代から40代へ行くほど、〈緩衝表現〉の使用率が低くなる。
6. 日本語は年上の話者が多用し、とりわけ40代男性に〈緩衝表現〉の使用率が最も多い。
7. 韓国語は年上の話者が最も低く、とりわけ40代女性の〈緩衝表現〉の使用率が最も低い。
8. 韓国語は全体的に女性よりは男性の使用が目立つほど多く現れた。
9. 日本語は〈初対面同士の会話〉と〈友人同士の会話〉に、大きな違いは現れていない。
10. 韓国語は〈初対面同士の会話〉に〈友人同士の会話〉より〈緩衝表現〉が多用される。
11. 日本語は年上の話者が多用し、韓国語は年下の話者が多用する。
12. 日本語においては、同じ年齢であれば初対面の相手に対しても、親しい相手に対しても緩衝表現の使用にあまり大きな違いがない。
13. 韓国語においては、同じ年齢では、親しい相手に対してより、初対面の相手に対し〈緩衝表現〉が多用される。

「というか」、「みたいな」のような〈緩衝表現〉について、「若者ことばである」や、「大人が違和感を持つ言語現象」、「乱れた表現」などと言う論者もいる。しかし、そういった発言は、どこまでも個々の論者の意識からの指摘である。現実の〈話されたことば〉の談話にあっては、本研究で見たように、日本語においては20代よりも40代の話し手が〈緩衝表現〉をより多く用いている傾向を示しているのである。また、日本語も韓国語も〈複合緩衝体〉は20代の話し手よりも40代の話し手の発話により多

く現れている。さらにこうした結果は、研究者の観察や話者の意識と、実際の言語使用の姿がどれほどかけ離れているかを見せてくれるものでもある。

こうした〈緩衝表現〉の使用は、一種の〈待遇表現〉として捉えることができる。「良かったです」と必要な文法要素だけを備えた表現ではなく、「良かったか思ったりするみたいな感じです」と、いくつもの緩衝体が重層的に現れる表現、また「仕事がないという」といった、必要な文法要素が欠けている表現、こうした表現は一方で発話内容を不明瞭なものにする。しかし、こうした不明瞭さは、他方で広義の politeness の戦略的表現だとも言えるものである。

本稿が示した〈緩衝表現〉の類型と、出現の様相の結果を見据えると、〈緩衝表現〉は一種の〈待遇表現〉であり、〈丁寧さの表現〉である。「違和感を持つ言語現象」というより、逆に話し手と聞き手が互いに違和感を持たず、丁寧に接するためのストラテジーとして用いられていると言ってよい。また〈緩衝表現〉の使用が、日本語では目上話者が多用し、韓国語では目下話者が多用するといった、傾向としての出現の様相の違いは、言語教育においても注目に値するものであろう。

註

- (1) 文末に述語を持つ日本語と韓国語において文の文末の構造を見ることは、当該の文全体を縮め括り、文の性格を決定づけるものを見ることになる。文を文たらしめるすべてが文末にあるゆえに、文末に注目することで、日本語と韓国語の〈話されたことば〉の文の姿がいかなるものであるかを見ることができるのである。
- (2) 詳細な談話データの作成過程や会話構成の諸条件、会話協力者の諸条件は金珍娥(2006)を参照。
- (3) 20~23歳の男女、30~33歳の男女、40~43歳の男女で会話の話者を構成する。10歳以上の年の差がある正確な世代別の言語使用を考察するため、〈20代初め〉、〈30代初め〉、〈40代初め〉と年齢の範囲を定める。
- (4) あらかじめ主題が決まっている会話ではなく、人と直接会って、決まった主題なしで自由に話し合う会話のことを本稿では〈自由会話〉と呼ぶ。
- (5) 国立国語研究所(1978:24)では、「事象を描くのにかなめになることばはいわゆる動詞だけでなく、形容詞などもある」とし、「それらを総称する場合は「述語詞」あるいは単に「述語」ということにする」としている。一方、韓国語においても, 최현배(1929:749,763)や허용(1975:42), 남기심(2001:73), 노마히데키[野間秀樹](1996b:137)などが、文の中心になる成分は述語であると、文における述語の重要性を述べている。
- (6) 「総合的」、「分析的」という用語は, 사비아(1998:221)とブルームフィールド(1965:271)が言語の分類法として、「総合的言語」、「分析的言語」という術語を用いているのにその例を見出せる。「総合的な形」と「分析的な形」という用語は、韓国語学においては菅野裕臣(1981,1988)が積極的に用いはじめ, 노마히데키[野間秀樹](1996b,2006)ではさらに論議が進められている。
- (7) 風間伸次郎(1992)は文末に現れる定動詞(finite verb)を用いて、日本語の動詞複合体の諸形式、相互の承接順序を述べている。
- (8) 노마히데키[野間秀樹](2002:23)の술어문(述語文 predicate sentence)と비술어문(非述語文 non-predicate sentence)の分類参照。倒置文の〈非述語文〉については金珍娥(2006,2008ab)参照。
- (9) 本研究では,「-요 /-이요」(-yo/-iyo)を韓国語における〈終助詞〉として規定している。この「-요 /-이요」は, 野間秀樹・村田寛・金珍娥(2004:61)で「丁寧化語尾」, 野間秀樹・金珍娥(2004:38,43)で「丁寧化の応答語尾」と「丁寧化の中断語尾」, 金珍娥(2005)で「丁寧化のマーカー」と呼んでいる。実際の会話では極めて多用されるにもかかわらず、既存の文法論では正面から対象化し扱われてはいなかった要素である。野間秀樹(2006)はこの「-요 /-이요」を初めて正面から論じている。
- (10) 述語文と非述語文の詳しい分析結果は金珍娥(2006)を参照。なお、非述語文の類型についての詳細は金珍娥(2006:133)を参照。また野間秀樹(2008:373-379)「〈主語-述語文〉を中心主義の桎梏」の議論も参照。
- (11) 各類型の〈緩衝表現〉としての位置づけは, 金珍娥(2008ab)を参照。
- (12) 金珍娥(2008b:71-72)では、日本語と韓国語の〈ぶら下がり文〉を次のように定義している：述語で一旦

終わった文の後ろに「なんて」、「なんか」、「え」、「 뭐」、「에」、「그냥」のように、〈ぶら下がる〉副詞類や間投詞的な要素がくっつき、述語の統合性を失う類型の文が存在する。これらを〈ぶら下がり文〉と呼ぶことにする。

- (13) 노마히데키 [野間秀樹] (1996a) は「더라고」, 「더라고요」全体を、単なる引用形ではなく、それ自体独立した〈体験法〉の形として記述している。金珍娥 (2008ab) では、実際の会話において「더라고」, 「더라고요」は、多くの場合、体験法のムードを生かし、体験したことや過去のことのごとく述べることで、端的に言うことを避け、事実を客観化、間接化する〈緩衝表現〉として用いられていることを指摘した。
- (14) 金珍娥 (2008b:66) では、〈連体形終止文〉は次のような性格により、〈緩衝表現〉の機能を帯びると論じている。「連体形はそもそも連体修飾語、つまり文の成分としては修飾語であって、終止形のような統合性と終結性を併せ持っていない。そうした統合性と終結性の欠如と、被修飾語を要求することが〈述語文〉を〈非述語文〉化する仕組みを作り上げる」。

参考文献

- 伊藤英人 (1989) 「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮学報』第 131 輯 天理：朝鮮学会
- 宇佐美まゆみ監修 (2005) 「BTS による多言語話し言葉コーパス — 日本語会話」東京外国語大学『21 世紀 COE プログラム言語運用を基盤とする言語情報学拠点』<http://www.coelang.tufs.ac.jp/>
- エメット啓子 (2001) 「「なんか」 — 会話への積極的参加を促すインタラクショナルマーカー」『言語学と日本語教育Ⅱ』東京：くろしお出版
- 大塚高信・中島文雄監修 (1982;1987) 『新英語学辞典』東京：研究社
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」『北の言語：類型と歴史』宮岡伯人編 東京：三省堂
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998) 『敬語表現』東京：大修館書店
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996) 『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京：三省堂
- 菅野裕臣 (1981) 『朝鮮語の入門』東京：白水社
- 菅野裕臣 (1986) 「中級講座」『基礎ハングル』第 2 号 東京：三修社
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人 (1988) 『コスモス朝和辞典』東京：白水社
- 金珍娥 (2002) 「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『朝鮮学報』第 183 輯 天理：朝鮮学会
- 金珍娥 (2003) 「韓国語と日本語における談話構造 — “turn-taking システム” から “turn-exchanging システム” へ —」『朝鮮学報』第 187 輯 天理：朝鮮学会
- 金珍娥 (2004a) 「韓国語と日本語の turn の展開から見たあいづち発話」『朝鮮学報』第 191 輯 天理：朝鮮学会
- 金珍娥 (2004b) 「韓国語と日本語の文、発話単位、turn — 談話分析のための文字化システムによせて —」『朝鮮語研究 2』東京：くろしお出版
- 金珍娥 (2006) 「日本語と韓国語の談話における文末の構造」東京外国語大学博士学位論文 東京：東京外国語大学大学院
- 金珍娥 (2008a) 「日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現」第 59 回朝鮮学会大会発表要旨 天理：朝鮮学会
- 金珍娥 (2008b) 「談話だったりする。 — 〈話されたことば〉への視座」待遇コミュニケーション学会講演会資料
- 金田一京助・山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄編 (2001) 『新明解国語辞典 第五版』東京：三省堂
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」『日本語学』Vol. 14 No. 11 東京：明治書院
- 佐竹秀雄 (1997) 「若者ことばと文法」『日本語学』Vol. 16 No. 4 東京：明治書院
- サビア, エドワード (1998) 『言語 — ことばの研究序説 —』安藤貞雄訳 東京：岩波書店
- 寺澤芳雄編 (2002) 『英語学要語辞典』東京：研究社
- 辻大介 (1996) 「若者におけるコミュニケーション様式変化」『東京大学社会情報研究所紀要』51 号 東京：東京大学社会情報研究所

- 寺澤芳雄編 (2002) 『英語学要語辞典』東京：研究社
- 寺村秀夫 (1982;2002) 「日本語のシンタクスと意味 第1巻」東京：くろしお出版
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』東京：岩波書店
- 中園篤典 (2006) 『発話行為の引用論の試み — 引用されたダイクシスの考察 —』東京：ひつじ書房
- 中西恭子 (2004) 「現代朝鮮語の引用構文について」『朝鮮語研究2』東京：朝鮮語研究会
- 野田尚史 (1998) 「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194 東京：国語学会
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『日本語の文法4 複文と談話』東京：岩波書店
- 野間秀樹 (1990) 「朝鮮語の名詞分類 — 語彙論・文法論のために —」『朝鮮学報』第135輯 天理：朝鮮学会
- 野間秀樹 (1997) 「朝鮮語の文の構造について」『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と朝鮮語(上)』国立国語研究所 東京：くろしお出版
- 野間秀樹 (2006) 「現代朝鮮語の丁寧化のマーカ “-yo/-iyo” について」『朝鮮学報』第199・200輯合併号 天理：朝鮮学会
- 野間秀樹 (2008) 「言語存在論試考序説I — 言語はいかに在るか —」野間秀樹編著 (2008) 所収
- 野間秀樹編著 (2007) 『韓国語教育論講座 第1巻』東京：くろしお出版
- 野間秀樹編著 (2008) 『韓国語教育論講座 第4巻』東京：くろしお出版
- 野間秀樹・金珍娥 (2004) 『Viva! 中級韓国語』東京：朝日出版社
- 野間秀樹・村田寛・金珍娥 (2004) 『ぶち韓国語』東京：朝日出版社
- 早津恵美子 (1998) 「日本語」『世界の言語ガイドブック2 アジア・アフリカ地域』東京：三省堂
- ブルームフィールド (1965) 『言語』服部四郎序・三宅鴻・日野資純訳 東京：大修館書店
- 白峰子 (2004) 『韓国語文法辞典』大井秀明訳 野間秀樹監修 東京：三修社
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』東京：くろしお出版
- 益岡隆志 (1998) 『モダリティの文法』東京：くろしお出版
- 益岡隆志 (2003) 『三上文法から寺村文法へ 日本語記述文法の世界』東京：くろしお出版
- 松井栄一 (2005) 『日本語新辞典』東京：小学館
- 松下大三郎 (1978;1989) 『標準日本口語法』東京：勉誠社
- 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』東京：三省堂
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』東京：くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店
- メイナード, K. 泉子 (2004) 『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』東京：くろしお出版
- 油谷幸利 (2006) 「接続形式による日韓対照」『朝鮮学報』第198輯 天理：朝鮮学会
- 국립국어연구원 [國立國語研究院] (1999) “표준국어대사전” 서울: 두산동아
- 남기심 [南基心] (2001) “현대 국어 통사론” 서울: 대학사
- 남기심 [南基心]・고영근 [高永根] (1993) “표준 국어문법론 개정판” 서울: 담출판사
- 노마히데키 [野間秀樹] (1996a) ‘현대 한국어의 대우법 체계’ “말” 제21집 서울: 연세대학교 연세어학원 한국어학당
- 노마히데키 [野間秀樹] (1996b) ‘한국어 문장의 계층구조’ “언어학” 제19호 서울: 한국언어학회
- 노마히데키 [野間秀樹] (2002) “한국어 어휘와 문법의 상관구조” 서울: 대학사
- 노마히데키 [野間秀樹] (2006) ‘현대한국어의 용언의 분석적인 형태에 대하여’ “*Whither Morphology in the New Millennium?*” Seoul: Pagijong
- 서정수 [徐正洙] (1996) “국어문법” 서울: 한양대학교출판부
- 서상규・구현정 공편 (2005) “한국어 구어 연구(2) — 대학생 대화 말뭉치를 중심으로” 연세대학교 언어정보개발연구원 서울: 한국문화사
- 연세대학교 언어정보개발연구원 [延世大學校 言語情報開發研究院] (1998) “연세 한국어 사전” 서울: 두산동아
- 趙義成 (1997) ‘현대한국어의 단어결합에 대하여’ “朝鮮學報” 第163輯 天理: 朝鮮學會
- 최현배 [崔鉉培] (1929;1994) “우리말본” 서울: 정음문화사
- 허웅 [許雄] (1975) “우리 옛말본 15세기 국어 형태론” 서울: 샘문화사
- Noma, Hideki. (2005) When Words Form Sentences: Linguistic Field Theory —

日本語と韓国語の談話における文末の緩衝表現の出現様相

- From Morphology through Morpho-Syntax to Supra-Morpho-Syntax. *Usage-Based Linguistic Informatics 2 Corpus-Based Approaches to Sentence Structures*. Takagaki, T., Zaima, S., Tsuruga, Y., Francisco, M. F. & Kawaguchi, Y. (eds.) Amsterdam: John Benjamins
- Ramstedt, G. J. (1939) *A Korean Grammar*. (= MSFOu 82). Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura
- Wales, Katie (1989) *A Dictionary of Stylistics*. London: Longman (Katie Wales (ウェールズ, ケーティ) (2000) 『英語文体論辞典』 豊田昌倫・宮内弘他訳 東京：三省堂)